

障害者の権利を守り、発達を保障するために

みんなのねがい

4

2025
No.714



特集

みんなのねがいと発達保障

人間らしい豊かな生活を求めて 安田菜津紀・塚田直也
「みんな」で「ねがい」を語り合う 河合隆平

新連載

ソーシャルワークってなんだろう？

木全和巳

みんなの ねがい

2025年4月号

No.714

- 1 人として 福場将太
- 2 【インタビュー】いま語りたい心の窓を広げて 宮崎信恵
- 4 教員のはじめの一步 小畑耕作
- 6 心に種をまく 安田菜津紀
- 7 あなたに届けたいこの一冊 菊地澄子
- 8 この子と歩む 南田恵子
- 11 進め！ 推し活道 稲垣大空

特集 みんなのねがいと発達保障

- 12 人間らしい豊かな生活を求めて 安田菜津紀・塚田直也
- 16 発達保障は北極星、全障研は北斗七星 池田 光
- 17 職場における発達保障的課題 瀧澤颯大
- 18 人の優しさにふれ続け 上西範洋
- 19 ちいさな朝市の実践 近藤未希子
- 20 自己実現をめざして 小淵隆司
- 21 「みんな」で「ねがい」を語り合う 河合隆平



- 24 私ときょうだい 関根果那
- 26 子どものミカタ 安藤史郎
- 28 シリーズ 18歳 清時忠吉
- 30 ソーシャルワークってなんだろう？ 木全和巳
- 34 暮らしの場は今 九内康夫
- 36 実践にいかず障害と医療 安藤佳珠子
- 38 ニュースナビ マイナ保険証問題 家平 悟
- 40 実践の魅力 井原あどか
- 43 全障研の支部ニュース、紹介します 豊田悦子
- 44 みんなのひろば
- 46 息子と歩く 千葉桜 洋
- 48 BOOK／編集後記

裏表紙 おいしいひととき 植山有希

デザイン・イラスト

うじたなおき、勝倉大和、ちばかおり
永野徹子、日本印刷、橋野桃子、山内若菜

表紙のこぼ

城跡に咲く桜の木々を夕陽が照らす。

花びらの淡いピンクにオレンジの光が混じって、なんとも柔らかな雰囲気にも包まれている。

仲良し4人組は、高校卒業の思い出作りでお花見に来たそうだ。しかもメンバーの誕生日祝いも兼ねて。なんだか出てくるもの見えるもの全てが眩しい。青春の瞬間に立ち会えて、写真に残せてよかった。彼女達はこれからそれぞれの道を進んでゆくけど、きっとこの時間を忘れないだろう。

鮮やかに咲き誇る満開の桜も素晴らしいが、はらはらと花びらが散ってゆくところが好きだ。

春の別れは切なくて、美しい。



表紙=土佐和史

とさ かずふみ／写真家。1977年大阪府生まれ。全国各地に出向き、旅ゆく道で出会ったひとや風景を撮り続け作品発表を行っている。2018年に写真集出版レーベルBUFFALO PRESSを立ち上げる。写真集に、「SUNLIGHT MEMORIES」(CITYRAT press)「北関東」「路地裏に咲いた花」(いずれもBUFFALO PRESS)がある。

教員のはじめの一步

第1回

信頼されるために



全障研和歌山支部

小畑耕作

こばた こうさく / 1951年生まれ。特別支援学校に長年勤める。退職後、元大和大学教授、現在太成学院大学非常勤講師、教員養成課程担当。

私は36年間、特別支援学校に勤め、小学部、中学部、高等部、進路指導担当、高等部学部主事、寄宿舎舎監等の任務を体験し、実践しました。障害児教育について知識や経験のまったくない中で、子どもたち、保護者のみなさん、先生方から、教育、発達のことなど多くのことを学び、育ててもらいました。このコーナーでは4回にわたり、特別支援教育に携わるみなさんに、私の思う「大切なこと」をお伝えできればと思います。

なぜ、先生になろうと思ったの？ どんな先生になりたいの？

今、学生たちに「なぜ、先生になろうと思ったの？」「どんな先生になりたいの？」と尋ねると「悩んでいた時に、我がことのように親身に相談にのってくれた」「自分の気持ちをわかってくれた」等で、そんな先生になりたいが大半でした。また、クラブ活動等で後輩や弟、妹に苦労して教えた時「わかった、できた」時の笑顔を見て、教えることに喜びを感じて先生になりたいと思ったようです。

では、どんな先生になりたいかと聞くと、これまでの体験から具体例が出されますが、概ね「教え方がうまい」「子ども



紹介者 菊地澄子
きくち すみこ／広島県出身。児童文学作家。元高校・特別支援学校教諭。「障害と本の研究会」代表

音にさわる —はるなつあきふゆをたのしむ「手」—

絵 作 広瀬浩二郎
日比野尚子
2021年 偕成社



この絵本は、約20センチの正方形で、蛇腹式に折り畳んだ形をしています。五つの場面で構成された物語は、点字つきです。本文の絵は多様な凸線で描かれ、指先でふれながら読むことができます。

主人公のさわるくんは、全身が「手」です。白い杖をもって、音を探しに出かけました。最初の場面の背景は、温もりのある桃色。サクラの花が咲いています。「はるの音は、やさしい！」さわるくんの周りは、さやさやとしていました。

二つ目は、鮮やかな緑色です。じりじりとセミのなきごえが聞こえてきます。まるでシャワーの音のようで、「なつの音は、はげしい！」です。

三つ目は、しっとりした橙色。落ち葉がふわふわとつもらい、じゅうたんになりました。「あきの音は、ふかい！」と、さわるくんは、匂いをかぎます。四つ目は、澄んだ水色です。さわるくんは、しんしんと降る

白い雪を見つけました。「天と地が、つながる。ふゆの音はしずか！」です。

最後は、明るくやわらかな黄色。さわるくんは、「みんなのはるなつあきふゆは、どんな音？」と、笑顔で問いかけています。

私はいつのまにか、聴こえる色や、見える音の世界にいました。ブツブツ・ざらざら・スベスベの絵にふれると、想像がふくらんできます。文中の白い杖が、魔法のステッキや楽器にも感じられました。日々、目で見ることによっていた私は、私のなかの「さわるくん」に出会えた気がします。すべての人に、ぜひ「手」で味わってほしいと思います。

蛇腹折りの裏面には、「21世紀版『耳なし芳一』」と題して、「あとがき」があります。そこには、本作を手がけた背景が紹介されています。一冊で二つの味を楽しめる、こころ躍るような、とっておきの一冊です。

特集

みんなのねがいと発達保障

『みんなのねがい』は「発達保障」という理念を土台に、今日まで歩んできました。

「発達保障」ということばは、一言では説明できませんし、人に伝えるのはなおさらむずかしいと感じることもあるかもしれません。でも、実は私たちの毎日の生活とつながっているのです。

「安心して眠りたい」「おなかいっぱい食べたい」「おもいっきり遊びたい」「自分の気持ちを安心して伝えたい」…。発達保障につながるこうしたねがいは、今日の社会や世界に目を向けたとき、障害児教育や福祉の現場だけにとどまらず、多くの人たちに共通するものではないでしょうか。

この特集では、発達保障の歴史を学び、障害のある人、支援者、教員、家族など、いろいろな立場の方とねがいを語り合うことで、発達保障の理解を深めていきたいと思います。

特別対談

人間らしい

豊かな生活を求めて

Dialogue for People 副代表

フォトジャーナリスト

安田菜津紀

『みんなのねがい』編集長

塚田直也

人の価値、人権の意味とは

塚田 発達保障の源流の一つである近江学園（滋賀県）は、1946年に創立されました。当時、街中には戦災孤児があふれ、生きることがままならない人たちがたくさんいました。近江学園を創立した糸賀一雄さんは、そうした子どもたちを保護して学園で受けとめました。保護した当初、子どもたちは自分の命を外敵から守るかのように背中を丸め、柔らかに、無防備になりやすいお腹を守るようにして寝ていたようです。安心・安全が保障された生活の中で、自分の存在を受けとめてもらい、自分の価値を実感していくことを通して、子どもたちはお腹を上にして眠るようになったようです。誰もが自分の大切さを実感でき、安心して

眠れる場、社会をつくることは大切な発達保障であり、安田さんの仕事（実践）とも共通することではないかと感じます。とりわけ、経済・軍事優先、平和を破壊する政治がはびこる今の社会ではとても大事なことだと思います。

安田 経済的な視点、社会に役立つか・役立たないかという尺度で人の価値を判断することは、障害のある方々の人権を無視した『優生保護法』を生み出した背景ですよね。

塚田 人の価値とは何か。とてもむずかしい問いですが、私たちは障害のある人たちとのつながりを通して、実践的に考えてきました。例えば、近江学園の実践では、重症心身障害児とされる子どもが、自分のおむつを替えようとする実践者の存在を感じ、相手の働きかけに応じ



「みんな」で「ねがい」を語り合う 発達保障のこれまでとこれから

東京都立大学 河合隆平



子どもに共感と信頼を寄せることから

発達保障のこれまでを知ることは、その歴史が築いてきた峰の頂上から発達保障の裾野の広がりを確かめ、私たちの眼が行き届かぬ地平の向こうを想像することにはほかなりません。

糸賀一雄たちによる近江学園やびわこ学園の実践から生まれた発達保障の考え方が、一つの施設のとりくみを超えて「この子らを世の光に」という糸賀の言葉とともに、障害のある子どもたちの権利を保障し、共に生きようとする人びとの拠りどころになったのは必然でした。「この子らに世の光を」とは、障害のある子どもへの憐れみのまなざしを向ける社会を表しています。一方で「この子らを世の光に」とは、障害のある子ども一人ひとりが人格の持ち主であることの確認のうえに、社会の主人公として育ち生きられる、もう一つの社会をつくることへの意志です。その社会をつくる第一歩

は、子どもに限りない共感と信頼を寄せることでした。

障害の重い子どもたちは「寝たきり」と言うけれど、子どもからすれば「寝かされきり」ではないかと捉え返してみると働きかけの幅も広がっていく。びわこ学園の療育を記録した映画『夜明け前の子どもたち』（1968年）では、目も見えず、耳も聞こえず、度重なる発作と闘いながら毎日を過ごしている「シモちゃん」が「笑顔」を見せる場面があり、「笑顔とみるのは、もしかしたら間違いかもしれない。だが先生たちに笑顔は確かに蓄えられた」とナレーションが添えられます。ささやかな表情の変化に込められたシモちゃんの生きようとする意志に共感を寄せながら、発達への信頼が生まれた瞬間でした。重症児教育における「笑顔の獲得」という教育目標にも、障害のある子どもの尊厳と発達の可能性を見出してきた歴史が刻まれています。



第1回 ほんとのねがい



大阪 安藤史郎 (あかつき・ひばり園)

私は、児童発達支援センターで発達相談員をしています。発達検査だけで子どもを理解しようとするのではなく、生活を通して子どもとわかり合いたいと思っているので、クラスの保育にも顔を出し、子どもたちとすったもんだしながらも毎日遊んで過ごしています。

◆楽しい！ が膨らんできた。
けれども…

昨年度のクラスでは、たかいたかいをしてもらっている友だちをにやにやと見ているだけ。「楽しそう…」という気持ちを膨らませていました。クラスが変わり、「ようやくぼくの番」と言わなければ、何度もちかいたかいを求めてくるようになりました。毎日療育に通う、4歳児のれんくんです。くすぐるとげらげら笑い、視線で何度も誘いかけてきます。おとなと遊ぶ楽しさが膨らんできました。

しかし、情動的な交流のある遊びは楽しむようになりましたが、いろいろ誘いかけてみても遊びが展開しない感じがします。片栗粉や寒天遊びではぐちゃぐちゃと触るだけで終わります。生活面もスムーズには向かいません。食事、着替え、トイレなど誘ってもやらせず、おやつ

を食べ終わったら遊びの時間なのに、いつも最後までゆっくりと食べていました。れんくんがねがっていることは「楽しみたい」だけなのだろうか。そんな思いが頭をかすめます。

◆一瞬の視線に込められた思い

7月に実施した発達診断では、積木が崩れても何度も積み直します。すべて積み終わるとお母さんや私に「できたよ」とまなざしを向けていました。その姿を踏まえて普段の遊びを見直してみると、黙々とパズルをやり、完成させると、近くにいた私をちらりと見てから崩していました。保育中、ビデオを撮っていました。にやにやと近づいてきて開いているモニターを閉じて「こらー」と言われてげらげら。プールでは、ペットボトルに水をためてはおとなにかけて「やめてー」の悲鳴にげらげら。「ちよっかい」をかけて反応を楽しんでいました。

れんくんは、本当は何をねがっているのでしょうか。

◆共感できぬ生活入遊び

発達診断の数日後。ふと、男子便器でおしっこをするれんくんに担任はびっく

ソーシャルワークって なんだろう？

一度しかない生活を支え、人生に寄り添い、

かけがえのない生命を共に輝かせるために

第1回

一人のソーシャルワーカーで ありつづけたい



日本福祉大学

木全和巳

きまた かすみ／日本福祉大学社会福祉学部。児童養護施設、知的障害児施設等を経て現職。研究テーマはソーシャルワーク、セクシュアリティ、権利保障など。著書に『〈しょうがい〉と〈セクシュアリティ〉の相談と支援』など

予測不可能な混迷の時代と社会の中で

私は、ソーシャルワークというこなれた日本語にすることがむずかしい輸入されたこのカタカナ言葉になぜかずっとこだわってきました。63歳になるいまでも私の大切なアイデンティティとして、どこでどんな仕事をしていても、そこに労働に見合う金銭的な対価があってもなくても、ソーシャルワークってなんだろうと問い続けています。そして、一人のソーシャルワーカーでありつづけたいと願い、思いがけない出会いと小さな成果に励まされつつ、たくさんの後悔や失敗をしながらも、それでもなんとか自分なりのつたない実践や活動や社会運動を続けてきました。

いま世界の中で、さまざまな格差が広がり、貧困が増大しています。いろいろな要因による複雑化する差別も根絶することはできないままです。対立と分断が広がっています。混迷や混乱の最中、まさに「デモクラシーの危機」の時代です。あえて「民主主義」ではなく「デモクラシー」とカタカナにしているのは、「デモクラシー」は単なる「イズム」「主義」ではないと考えているからです。

あちこちで紛争や戦争が起こり、被害も拡大しています。理不尽にもかけがえのない命が失われています。こうした国家権力による大きな暴力だけではなく、私の身の回りではさまざまな虐待、性暴力、不適切な関わりなど、教師、支援者などによる小さな権力による暴力も後を絶ちません。「小さな」と書きましたが、被害者にとっては決して小さな痛みや

傷ではありません。国家をはじめとするさまざまな権力（パワー）との関係とソーシャルワークは切り離せません。ソーシャルワークは「エンパワメントと解放を促進する」ことを目的とする実践です。この「エンパワメントと解放」については、この連載でみなさんと共に考えたい言葉です。

政治的にも歪んだナショナリズムや排外主義がニッポンのみならず、アメリカやヨーロッパでも勃興（ぼつこう）しています。自国第一主義、能力主義、生産性第一主義、自己責任論、優生主義、性と生へのタブー、蔑視、優越感、迷惑視、ヘイトなどを背景に機能しようがある人たちの「人間としての基本的な権理（ヒューマンライツ）」を「承認」しない現実が多くあります。ソーシャルワークの大切な価値は、「人間の権理（ヒューマンライツ）」と社会正義（公正）（ソーシャルジヤステイス）の実現です。なぜ実現できていないのか？ どうすれば実現できるのか？ 「はて？」と、いつも悩み考えながら実践し続けているのが、私という一人のソーシャルワーカーです。

初回ということもあり、さらっと読めてしまいで、それでいて立ち止まってどのようなことだろうと考えたい、少し抽象的な概念を並べてしまいました。たとえば、「ヒューマンライツ」は「権利」でよいのか「権理」なのかという翻訳語一つとっても、私の中では大きな課題なのです。なかなか一人ひとりに根づいていかない「ヒューマンライツ」という思想。この思想そのものが問われる大きな時代の転換期にあって、改めて考え直してみるこの大切さも含め、あえて

引っかかり、ゴツゴツした感覚を共有したいとも思います。

どうしたら立ち止まって考えることから逃げない、考えることをあきらめない私たちでありつづけることができるのでしょうか。

「私」を語ることと「自己覚知」

ソーシャルワーカーという「立ち位置」を確認しながらこうして綴っていくとうとする時に、いつも私が大切にしていることは、「自己覚知」と「共感的理解」という言葉です。

自己紹介をするということは、「自己覚知」ということとつながっています。私たちは、自分のレンズを通して、他者たちや自分や社会や自然を観ています。こうした見立てを通して働きかける対象を認識しつつ、具体的な手立てとして働きかけをしています。このレンズは、学び合いつつ獲得してきた知識、自分の中で大切にしてきた価値、さまざまな体験とからだがぶつかり合いながら、他者たちとさまざまな組織でも関わり、さまざまな出来事に出くわし、無数の体験を積み重ねていきます。いつも自分で選ぶことはできません。そんな中で、誤学習も含め学習をしつつ、時に一度学んだことも学びほぐし（アンラーン）もしながら、感覚や言葉による自分なりの価値観を磨き、自分なりのレンズを創造していきます。この自分のレンズの歪みや色づき具合をよく知ろうとすることは、ソーシャルワークという実践をする時には、欠かせない大切な作業になります。自分の弱さを認めることに

精神障害の理解と支援① 精神科医(療)との付き合い方



日本福祉大学

安藤佳珠子

あんどう かずこ／専門は社会福祉学。ひきこもりやその家族の活動を支援。精神科病院等でソーシャルワーカーとして勤め、現在は日本福祉大学の社会福祉学部社会福祉学科講師。論文「不登校経験があるひきこもりの若者の葛藤する機会を保障するソーシャルワーク：発達集団が生み出す関係性のなかでの自立」等。

この連載では、精神障害の理解と支援について考えていきたいと思えます。身体・知的・精神障害が一元化されて20年も経ち、障害福祉の分野では精神科医療と付き合うことが増えてきました。初回は、「精神科医(療)との付き合い方」についてとり上げます。

やっとの思いで精神科に行ったもの...

やっとの思いで、精神科病院に当事者で行ったものの、あっさり診察が終わってしまったり、薬も出なかったり、通院の必要性もしつかりと示されなかったり...と、そんな経験はありませんか？

例えば、山田高史(仮名)さんの事例です。長年、母親から相談を受けていた支援者は、高史さんの精神科受診を勧めました。当初、受診をためらっていた高史さんでしたが、「自分のつらさ」を知りたいと受診を決意しました。緊張の中で、医師に生育歴や日常の生活状況を話しました。その後、何回かに分け心理検査も受け、自閉スペクトラム症と診断されました。しかし、医師からは「服薬は不要。必要ならまた受診を」と言われただけでした。高史さんは「自分のつらさをわかってもらえなかった」と落胆し、

もう精神科には行かないとさえ言います。家族も支援者も、「当たった医師が悪かった。高史さんを傷つけてしまった」と受診したことを後悔しました。

精神科医に期待しつつもいじわるでこっぴどいかな？

高史さんや家族、支援者の中には、「精神科医なら、ちゃんと話を聞いてくれる」「先生なら的確な助言をくれるのではないか」「精神科に行けば解決の糸口が見つかるのではないか」そう期待してしまう気持ちはなかったでしょうか。もちろん、そうした気持ちも理解できます。

しかし、精神科医の主な仕事は、精神病理をアセスメントし、診断をすること、それに基づいて薬物療法や精神療法を行うことです。ただ、外来での診察は5分から10分が基本で、とても短く感じられる方もいます。もちろん、状況によっては時間をとって話を聞きます。また、医師によっては診察時間を長めにしたり、当事者の話をじっくり聞いたり、外部のケース会議にも積極的な人もいます。個々の医師の診療スタイルによるところが大きいです。

高史さんを診察した医師は、ひどい医



ニュースナビ

News Navi

2025年4月号

マイナ保険証は何が問題か？ 医療を受ける権利を守るための運動

昨年12月2日より、これまで使っていた健康保険証の新規発行・更新が停止されました。いまの保険証は、最大で1年間（2025年12月1日まで）使えますが、加入している健康保険によって有効期限にちがいがあがあるため、自分の保険証がいつまで使えるか確認する必要があります（有効期限のちがいは図をご覧ください）。

政府はこの1年をかけてこれまでの健康保険証を廃止し、新たな移行先としてマイナカードと健康保険証を一体化させた「マイナ保険証」の原則利用を推進しようとしています。しかし、このマイナ保険証移行政策には、大きな欠陥があり、とくにカードを自分で管理や利用することがむずかしい人々への支援策がほとんどないという問題があります。そのため意思決定に支援が必要な障害者や高齢者などは、マイナ保険証から置き去りにされている実態があります。厚労省は、マイナ保険証を持たない人・持てない人には「資格確認書」を発行するとしていますが、医療を受けるために必要な保険証に、制度的格差を持ち込むべきではありません。

政府のマイナカード・マイナ保険証利用促進“ごり押し”政策によって、私たち障害者・家族の医療を受ける権利が脅かされようとしています。マイナ保険証で起こる問題をしっかりとつかみ、誰もが安心して受けられる医療制度を取り戻していく運動がいま求められています。

最大の問題「保険証発行義務の廃止」

今回の健康保険証の廃止・マイナ保険証移行政策の最大の問題は、これまで保険者（健康保険事業の運営主体）に義務付けられていた「保険証発行義務」がなくなりました。この発行義務があったからこそ、私たちは国民健康保険や社会保険などを問わず、どの健康保険に加入していても必ず保険証が手元に届けられてきました。また、一度加入すれば、有効期限がきてもとくに更新手続きなどをしなくても自動更新され、新しい保険証が送られてきました。

日本の医療制度は、この発行義務を土台にして、国民全員を公的医療保険で保障する「国民皆保険制度」を成り立たせてきました。この一番大切な制度の土台を根本から壊したのが、今回のマイナ保険証であり、今後、この制度改悪の大きな影響を受けることが心配されます。

マイナ保険証で拡がる社会保障の自己責任

マイナ保険証は、マイナカードを持っている人が、保険証機能を一体化させる手続きを行ってはじめて利用できるものです。このマイナカードの有効期間は10年ですが、カードに組み込まれているICチップ（電子証明書）の有効期限が5年であることから結局5年に一度は更新手続きを自分で行わなければなりません。この



笑顔溢れる店内に

京都 植山有希

chouchouサクラティエは、

2016年にオープンした「お子様から大人まで、みんなが笑顔に！」がコンセプトの絵本カフェです。店内にはたくさんの絵本が並んでおり、休日は幅広い年代の方で賑わっています。

カフェで働く仲間たちは、フロア、厨房とそれぞれ自分の仕事に誇りをもっています。お客様が来られるとそんな仲間たちの笑顔が輝きます。

店内では、仲間がいていねいに焼きあげた「くるりんばあ夢」や世界に一つだけの「オリジナルブレンドティー」折りのある「まじ綾部」京都市綾部産の筍から作った「オリジナルメンマ」の販売もしています。

綾部にお越しの際は、ぜひ！

